



Title	「メタ・トランスリンガルな文学」が描く言語実践の詩学：多和田葉子『地球にちりばめられて』を事例とした試論
Author(s)	小幡，佳菜絵；ストゥルーベ，友紀
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2026, 22, p. 134-147
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/105100
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究論文》

「メタ・トランスリンガルな文学」が描く言語実践の詩学

— 多和田葉子『地球にちりばめられて』を事例とした試論 —

小幡 佳菜絵 (北京大学)

xfjch19@tsinghua.org.cn

ストゥルーベ 友紀 (Columbia Basin College)

ystrube@columbiabasin.edu

The Poetics of Language Practice in ‘Meta-Translingual Literature’:

A Discussion Based on Yoko Tawada’s *Scattered All Over the Earth*

Kanae OBATA & Yuki STRUBE

要 旨

本稿は、多和田葉子（1960-）による小説『地球にちりばめられて』（2018/2021）を事例として取り上げ、トランスランゲージング（TL）理論と文学研究との架橋（trans-disciplinary）を試みる試論である。本稿では、登場人物が織りなす言説空間を「トランスランゲージング・スペース」と解釈する。そのうえで、Moment Analysis (Li, 2011) を方法論として文学作品に援用し、登場人物の言語観が示されるメタ言語的な実践に焦点をあてる。分析にあたっては、「動態性」「創造性」「批判性」というTLの主要な特徴を構成する3つの観点に基づく枠組みを設定し、本作品とTL理論の共通点について検討する。これらをふまえ、本稿では本作品を「メタ・トランスリンガルな文学」(cf. 佐野, 2023)として位置づけることを提案し、その教育学的意義についてさらに検討する。言葉遊びやメタ言語的な詩的表現の豊かさが特徴的な「メタ・トランスリンガルな文学」の導入は、「ことば」の教育実践の可能性をさらに拡張する。

Abstract

The present research forwards a “trans-disciplinary” approach (García & Li, 2014) that integrates translanguaging (TL) theory and literary studies, using Yoko Tawada’s (1960-) novel *Scattered All Over the Earth* (2018/2021) as a case study. In this study, the discursive space constructed by the characters is interpreted as a “translanguaging space.” Building upon this premise, the authors employ Moment Analysis (Li, 2011) as the methodology of literary analysis with a focus on the metalinguistic practices that reveal the characters’ underlying perspectives on language. To this end, an analytical framework is further devised, drawing upon three pivotal features of TL: dynamicity, creativity, and criticality. Building on these findings, the paper proposes that the novel be positioned as “Meta-translingual literature” (cf. Sano, 2023) and proceeds to examine its pedagogical implications. The study posits that Meta-translingual literature, marked by richness of “fun with words” and metalinguistic poetic expression, serves to expand the possibilities for

practical application in language education.

キーワード：「メタ・トランスリンガルな文学」、動態性、創造性、批判性、Moment Analysis

Keywords: 'Meta-Translingual Literature', Dynamicity, Creativity, Criticality, Moment Analysis

1. 「メタ・トランスリンガルな文学」としての『地球にちりばめられて』

本稿は、ドイツ在住の作家である、多和田葉子（1960-）による小説『地球にちりばめられて』（2018/2021）¹⁾ が描写する、登場人物たちの言語実践及びメタ言語的な実践と、トランスランゲージング理論（García, 2009; Li, 2011; García & Li, 2014; Otheguy et al., 2015; Li, 2018）の接点と共通性を明らかにすることを目的とする。そのうえで、本作品をトランスランゲージングとの親和性が極めて高い「メタ・トランスリンガルな文学」（cf. 佐野, 2023）として位置づけることを提案する。さらに、この試みを通じて、本作品が「メタ・トランスリンガルな文学」として、どのようにリテラシー教育や、バイ・マルチリンガル教育をはじめとする「ことば」の教育実践に貢献しうるのか、その道筋を模索する。

トランスランゲージング（translanguaging, 以下 TL）理論では、バイ・マルチリンガルが有するすべての言語資源を、「日本語」「中国語」などの個別命名言語（named languages）の境界線を超越した「ひとつのつながったレパートリー」（加納, 2016, p. 3）として捉える。個別命名言語とは、社会政治的または民族的な帰属に準じて規定された、社会的な構築物としての言語の側面のことを指す（Otheguy et al., 2015）。本稿では、このような立場をとる TL 理論と多和田作品との共通性に注目し、作品の教育学的意義について探る。

また、本稿で提案する「メタ・トランスリンガルな文学」は、佐野（2023）が提唱する「トランスリンガルな文学（translingual literature）」の射程を拡張する試みでもある。「トランスリンガルな文学」とは、「主体的なバイ・マルチリンガルな書き手による表現様式」（p. 190）のことを指す。佐野（2023）は、温又柔の『真ん中の子どもたち』（2017）やサンドラ・シスネロスの『マンゴー通り、ときどきさよなら』（1984/2018）を具体的な事例として取り上げ、これらの作品に観察される複言語性に焦点をあてている。つまり、佐野（2023）の分析では、登場人物の複言語性を特徴とした語りが、TL に根ざした書き手の言語実践として主に解釈されており、そのうえでこれらの作品を題材としたリテラシー教育の可能性が提案されている。

本稿では、物語世界における登場人物の発話の形式的側面が提示する複言語性だけではなく、作品の物語世界や多和田の文体が主題として提示するメタ言語的な次元も視野に入れて、より広範に検討する。本稿が想定する「メタ言語的な次元」としては、主に次のようなものが挙げられる。すなわち、(1) TL に特徴づけられる営為や言語そのものとの向き合い方に関して、登場人物たちが自身の言語観を開示するメタ言語的な発話、(2) 言葉遊びという TL 的な営為を伴う多和田独自の文体、そして、(3) その文体に対する多和田自身の自己再帰的な見解（多和田, 1999/2022a, 2003/2012）などである。これらのメタ言語的な描写や記述に関する考察をふまえて、本稿では本作品が位置づけられるであろう「メタ・トランスリンガルな文学」が秘める教育実践への貢献の可能性についてさらに提案する。

ここで、本論に入る前に本作品の梗概を示す。本作品は、『星に仄めかされて』（2020/2023）、『太

陽諸島』(2022b)とともに三部作を成す、その第一作目である。主要登場人物の Hiruko は、留学中に自国が消滅して帰還不能となった列島の出身である。そのため、「不法滞在の外国人」(p. 46)にならないよう、デンマークのメルヘン・センターで語り部として生計を立てている。彼女は、「自分が生まれ育った国がすでに存在しない人たち」(p. 9)を取り上げる番組に出演し、自身の「手作り言語」(p. 13)である「パンスカ語」を披露する。この言語は、「スカンジナビアならどの国に行っても通じる人工語」(p. 42)であり、その名称は「汎(pan-) スカンジナビア語」に由来している。この言語に関心を抱いた大学院生のクヌートは Hiruko とともに、彼女の同郷の話者を探す旅に出る。二人は、ドイツでインド系のアカッシュやノラと出会った後、鮭職人のテンゾ(本名: ナヌーク)に接触する。しかし、テンゾは、同郷出身者ではなく「第二のアイデンティティ」(p. 155)として、自らこの言語を学んだのだった。その一方で、テンゾは Hiruko の同郷人と思われる Susanoo の情報を提供し、一行は南仏のアルルへと向かう。そこで Susanoo と遭遇するが、「沈黙の人」(p. 288)である彼は、言語を理解している素振りを見せながらも話すことはない。最終的に彼らはスウェーデンの失語症研究所へと向かうこととなり、物語は新たな旅の始まりで幕を閉じる。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、TL 理論(2.1 節、2.2 節)及び「トランスリンガルな文学」(2.3 節)を中心とした先行研究を概括し、研究課題を示す(2.4 節)。本稿では、本作品の登場人物たちが織りなす言説空間を「トランスランゲージング・スペース(translanguaging space, 以下 TLS)」(Li, 2011, 2018)と解釈し、この解釈を基に、主に Li (2011)を参照しながら、「動態性」「創造性」「批判性」という3点を TL 理論の鍵概念として抽出する(2.2 節)。また、3 節では Moment Analysis (Li, 2011)を主軸とした本稿の研究方法について述べる。4 節では、2.2 節で抽出した「動態性」「創造性」「批判性」という、TL をめぐる3つの観点を軸として研究課題への回答を試みるとともに、本作品におけるメタ言語的な実践について考察する。さらに、5 節ではこれらの考察をふまえて、本作品を含む「メタトランスリンガルな文学」が秘める、リテラシー教育やバイ・マルチリンガル教育といった「ことば」の教育実践への貢献可能性について検討し、提案する。

2. 先行研究と研究課題

本節の前半(2.1 節及び 2.2 節)では、TL に関する本稿の目的に照らした鍵概念を概括する。2.3 節では、主題である「トランスリンガルな文学」(佐野, 2023)と、その近接的な概念である「エクソフォニー」「エクソフォン文学」(多和田, 2012)について整理する。2.4 節では、2.2 節で抽出した「動態性」「創造性」「批判性」という3つの鍵概念に沿った3点の研究課題(RQ)を提示する。

2.1 トランスランゲージング(TL)理論の系譜

TL は、バイ・マルチリンガルの言語資源を、個別命名言語の境界線を越えた「ひとつのつながったレパートリー」(加納, 2016, p. 3)として捉える概念である。ここでいう個別命名言語とは、社会政治的に規定された構築物としての言語の側面のことを指す(Otheguy et al., 2015; 湯川・加納, 2021)。例えば、「デンマーク語」「スウェーデン語」「ノルウェー語」といった「言語の境界線」は、「言語学的には恣意的なもの」(ロメイン, 1994/1997, p. 17)と概して理解されている²⁾。

TL 概念の系譜学的起源は、Williams (1994, 1996)によるウェールズ語教育実践“trawsieithu”に

ある (García & Li, 2014, p. 20)。これは、学習者が英語とウェールズ語を交互に活用する実践を指し (García, 2009; García & Li, 2014)、教育実践者の明確な教授意図のもと、2つの言語を並行して使用することで、両方の言語の認知・学力言語能力 (Cognitive/ Academic Language Proficiency, 以下 CALP) を総合的に育むことを目的としていた。CALP とは、Cummins (1979, 1980) が提唱した、教科学習に必要とされる言語能力を意味する概念である。その習得には5〜7年ほど要すると考えられており、対人関係に必要な言語能力で、2年ほどで習得可能とされる BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) とは、概念的に区別される言語能力である (カミンズ, 2021)。このような起源をもつ TL 概念は、その後、Baker (2001) や García (2009) によって取り上げられたことで、英語圏で広く受け入れられるようになった (加納, 2016)。

他方、佐野 (2023) は、TL 研究の動向を社会言語学的志向と教育学的志向の2つに分類している³⁾。前者は Li (2011)、Ren et al. (2022)、Zhang and Ren (2022) などが示す、日常の相互行為や言語実践の分析を中心的な研究課題として含む。一方、後者は、Cenoz and Gorter (2017) や Seals et al. (2020) にみられる、言語習得における教育方略の研究である。この両者は、Cenoz and Gorter (2015) の “being multilingual” と “becoming multilingual” (p. 3) という概念に呼応しており、分離されるのではなく、統合的に理解されるべきである。この指摘をふまえて本稿では、2つの志向の統合を次のように目指す。まず、次節で本作品の登場人物たちの発話が構築する言説空間を TLS として解釈し、そのうえで研究課題を設定する。そして、4節を中心に、その探索と回答に取り組む (社会言語学的志向)。さらに5節では、TL や流動的な言語のあり方をメタ言語的に表現する本作品が秘める、リテラシー教育やバイ・マルチリンガル教育への貢献の可能性と課題を提示し、教育学的志向との統合的な議論を目指す。

2.2 「動態性」「創造性」「批判性」という TL の主要な特徴

本稿では、TL を「動態性」「創造性」「批判性」という3点から整理する。第一に、「動態性」は「動的バイリンガリズム (dynamic bilingualism)」(García, 2009) と、「ランゲージング (linguaging)」(García & Li, 2014, pp. 7-11) の2点に由来する。前者では、バイ・マルチリンガルの言語資源を「ひとつのつながったレパートリー」(加納, 2016, p. 3) として捉え、さらに、このようなレパートリーを、個人の「イディオレクト (idiolect)」(Bloch, 1948; Otheguy et al., 2015) として理解する。このようなレパートリーを構成するあらゆる言語的要素 (features; 例えば、単語や形態素など) は、社会環境との相互作用や生の経験を通じて更新され、発達し続ける (すなわち、動態性をもつ)。つまりこの考え方では、バイ・マルチリンガルを政治・歴史的な文脈を生きる社会的な存在とみなし、その言語実践を動的なプロセス (a process) として捉える。これは、言語を分離可能で自律的な構築物 (a product) として捉える「減算的／加算的バイリンガリズム」(Lambert, 1974) の静的な理解と対置される考え方である。

他方、「ランゲージング (linguaging)」は、「人間が意味生成・理解をする活動」(湯川・加納, 2021, p. 55) のことを指し、「多感覚・多モダリティ (multisensory and multimodality)」に基づく動的な営みとして説明される (Li, 2018)。つまり、「ランゲージング」とは、当事者が有機的な身体性を基盤とし (=多感覚)、視覚や聴覚、触覚などの多モダリティを文脈に応じて (=流動的・動的・即興的に) 総動員する、記号論的な営みであると考えられる。

第二の「創造性」、第三の「批判性」は、Li (2011, 2018) の TLS 概念と深く関わる。本稿では、本作品の登場人物が織りなす言説空間を、TLS として解釈する。TLS とは、「TL を可能にする場 (a space for the act of translanguaging)」であると同時に、「TL によって構築される場 (a space created through translanguaging)」である (Li, 2011, p. 1223)。TLS では、イデオレクトが複雑に混ざり合い、新しい意味やアイデンティティが生まれる。TLS におけるこのような「創造性」は、「言語使用を含む行動のルールや規範を守るか破るかを選択する能力」(Li, 2011, p. 1223) と定義され、「言葉遊び (fun with words)」に代表される、ユーモアを伴う言語実践において特に顕著に現れる。例えば、「白領狗 (bái lǐng gǒu; “white-collar dog”)」と “bilingual” (Li, 2011, p. 1226) にみられるような、音声的な連想や連関に基づく言葉遊びがその具体例である。

さらに TLS は、Li (2011) によると「文化 (的) 翻訳 (cultural translation)」(バーバ, 1994/2012) が実現する空間として解釈できる。つまり、TLS は社会的に「異種」とみなされがちな言語的・文化的な資源や規範が出会い、接触する「境界線上の交渉の場」(バーバ, 1994/2012, p. 372) であると考えられる。このように、社会政治的に構築された個別命名言語やその規範が異種混濁的に交錯する「境界線上の場」である TLS において、「創造性」の発露は必然であるといえるだろう。

次に「批判性」とは、「利用可能な根拠を(中略)活用し、文化的、社会的、言語的現象を(中略)問い直し、見解を表現する能力」(Li, 2011, p. 1223) を指す。この「批判性」には、「創造性」と相互に関わり合いながら社会改革の契機を創出することが期待される (García & Li, 2014, pp. 66-68)。なぜなら、「創造性」がもたらす「境界」の拡張や変容の営みにおいては、「境界」そのものを批判的に捉え直す視座が求められると同時に、それが促されるためである (Li, 2011)。このように、TL の「トランス (trans-)」には「境界」を批判的に再考し、社会正義を志向する「変革 (trans-form)」の意味も込められている (García & Li, 2014, p. 3)。

本節では、以上のように、TL の主要な特徴として「動態性」「創造性」「批判性」を措定した。2.4 節では、この3点から構成される理論的枠組みを用いて研究課題 (RQ) を設定する。さらに4節では、本作品の登場人物たちの言説空間を TLS とみなし、TL の特徴がメタ言語的な性格を帯びて、どのように表象されているのかについて中心的に検討する。

2.3 「トランスリンガルな文学」と「エクソフォニー／エクソフォン文学」

本節では、佐野 (2023) が提唱する「トランスリンガルな文学 (translingual literature)」と、多和田 (2012) の「エクソフォニー／エクソフォン文学」を比較し、本稿への示唆を整理する。「トランスリンガルな文学」は「主体的なバイ・マルチリンガルな書き手による表現様式」であり、その焦点は「産出されたテキスト」そのものではなく、書き手の「言語実践」と「マルチリンガルな主体」におかれる (佐野, 2023, p. 190)。そして、佐野 (2023) によれば、この概念は、リテラシー教育への貢献という教育学的志向をもつ。ここでは例えば、複言語性に特徴づけられた文学作品のテキストを題材に、つまり基点として、書き手がなぜ「いわゆる規範的な書き方」と異なる表現を選択したのかという、書き手の主体性や意図について学習者が想像し読み解くなどの教育実践が提案されている (佐野, 2023, p. 191)。一方、「エクソフォニー」は「母語の外に出た状態一般」(多和田, 2012, p. 3) を指し、「自分を包んでいる母語の響きから、ちょっと外に出てみる」という試み (p. 7) として定義される。この概念に紐づく「エクソフォン文学」は、「創作の場からの好奇心に溢れた冒険的な発想」

(p. 7) から生まれる文学のことを指す。

2.2 節の検討を受けてこれらを比較すると、両者は「動態性」と「批判性」において共通しており、言語の静的で「規範的な固定性」(尾辻, 2022, p. 56) や「母語イデオロギー」(榎原, 2019, p. 44) を無批判に受容しない姿勢を共有している。これは、標準語を含む「正統言語」(Bourdieu, 1991) にせよ「母語」にせよ、特定の言語(変種)やそれに紐づく規範的な文体を特権化しない、という姿勢が共通していることを示している。ただし、「創造性」の観点では両者に相違がみられる。「トランスリンガルな文学」は教育学的文脈に重点をおき、言語実践を基点に、読み手としての想像力・思考力の涵養やリテラシー教育への貢献が期待される(佐野, 2023, p. 193)。一方、「エクソフォン文学」はメタ言語的次元への「好奇心」(多和田, 2012, p. 7) を起点としており、言葉遊びや「手作り言語」、パンスカ語の描写といった実験的表現が特徴的である。この違いが、佐野(2023)の指摘する概念的な「ずれ」(p. 190)の要因と考えられる。

このように、「トランスリンガルな文学」と「エクソフォン文学」という両概念は、言語規範の静的な固定性への抵抗という点において共通するが、「創造性」に関する焦点は異なる。教育学的文脈において「トランスリンガルな文学」が書き手の主体的な言語実践に重点をおくのに対し、「エクソフォン文学」は言語的な境界の越境そのものを創作活動における詩的・実験的契機として扱う。さらに、これら両概念に対し「メタトランスリンガルな文学」は、文体的遊戯性に加え、登場人物のメタ言語的発話を分析対象に組み込み、言語観そのものを主題化する点で、「トランスリンガルな文学」と「エクソフォン文学」という両者の射程を統合・拡張することを試みる。

総じて、本稿が提案する「メタトランスリンガルな文学」は「トランスリンガルな文学」と比べて、複言語的表現の記述にとどまらず、作品内部における言語観、規範観、翻訳観の省察を分析の中心に据える点に、その独自性がある。佐野(2023)の枠組みが主に書き手の言語実践に焦点をあてるのに対し、「メタトランスリンガルな文学」は、その「メタ性」によって、読者の「批判的メタ言語的認識(critical metalinguistic awareness)」(ガルシアほか, 2016/2024, p. 61)や言語資源を創造的に捉える態度を育むことを、その教育的意義として志向している。つまり「トランスリンガルな文学」が目指す、複言語性を特徴としたテキスト表象を題材に書き手としての「読み手意識(audience awareness)」(佐野, 2023, p. 191)や主体性を育むことに加え、「メタトランスリンガルな文学」では、登場人物たちの語りや言葉遊びに立ち現れる、TLと高い親和性をもつ言語観、つまりメタ言語的次元を主題として、「ことば」そのものを省察し捉えなおす教育実践の可能性を新たに提案する。

2.4 研究課題(RQ)

本稿では、研究目的(1節)及び2.2節の議論に特に依拠して、次の3点の研究課題(RQ)を設定する。4節では、これらの研究課題について具体的に考察する。

- (1) 本作品では、TLの「動態性」に関して、どのようなメタ言語的な描写が観察されるか(RQ1)。
- (2) 同様に、TLの「創造性」に関して、どのようなメタ言語的な描写が観察されるか(RQ2)。
- (3) さらに、TLの「批判性」に関して、どのようなメタ言語的な描写が観察されるか(RQ3)。

3. 研究方法

本稿では、研究方法として **Moment Analysis** (Li, 2011) を採用する。この研究方法は、主に TLS の「創造性」と「批判性」の分析を志向した方法論である (Li, 2011)。本稿では、本作品の登場人物による言語実践及びメタ言語的な実践が展開される言説空間を TLS と解釈しているため、この方法論が妥当であると判断した。この方法論では、従来の言語学の実証研究が重視してきた頻度や規則性などのパターンではなく、偶発性や即興性、一回性に特徴づけられる営為や事象に探索の軸足をおく (Li, 2011, p. 1224)。本稿では、このような立場をとる **Moment Analysis** を文学研究に援用することを試みる。この点に、研究方法論の観点からみた本稿の新規性や独自性を見出すことができる。

また、文学作品を研究対象として選択することが妥当であると本稿が考える理由は、主に次の 2 点にある。第一に、文学作品の志向性や特長として、登場人物の内的な意識や《声》⁴⁾ を丁寧に描くことが挙げられる。Otheguy et al. (2015) は、TL の「動態性」との関連において、イディオレクトを「個人の心的な文法 (the person's mental grammar)」(p. 289) と捉え、「当事者の内的な視座 (the insider's perspective of the speaker)」(p. 281) に着目する必要性を説いている。このことから、文学作品を対象とした研究だからこそ丁寧に読み解くことのできる、TL の「動態性」の諸相があると考ええる。第二に、TLS の「創造性」と「批判性」の検討においても、言語実践と同様に、文学作品が特長的に描くメタ言語的な次元を探索することが重要である。言語実践という行為の次元だけではなく、言語実践に対する解釈や意味づけ、価値づけといったメタ言語的な次元も研究対象とすることで、当該言語実践をより多角的かつ深く記述し、理解することが可能となる (Li, 2011)。

本稿では、次の具体的な手順に従い、執筆者 2 名で協働して分析を行った。まず、本作品の登場人物たちが構築する言説空間を TLS として解釈するという共通認識を、事前に形成した。そのうえで、執筆者 2 名がそれぞれ『地球にちりばめられて』を読み進めた。各自が作品を読み込む際には、Li (2011) による“moment”の定義 (p. 1224) を参照し、TL を特徴づけるうえで「重要である (outstanding significance を有する)」と思われる箇所や、TLS の構築という観点から、物語の展開上で「独自性 (distinctiveness)」や「影響力 (impact)」が感じ取れる箇所をそれぞれ記録した。その後、2 名の解釈を照合し、解釈が大きく異なる場合は対話を重ねた。最後に、抽出した箇所を 2.2 節で述べた「動態性」「創造性」「批判性」の観点から評価し、RQ への回答を試みた。

4. 本作品における「メタトランスランゲージング」表象

本節では、2.4 節で提示した 3 点の RQ に対する回答を試みる。これらの RQ は、2.2 節で抽出した「動態性」「創造性」「批判性」という 3 つの特性に立脚して設定されている。そのため、本節ではこの 3 つの特性に沿った節構成を採用している。

4.1 「動態性」—パンスカ語と「ダシ」の隠喩—

本節では、本作品における「動態性」の表象のうち、まずはパンスカ語に着目して考察する。パンスカ語は、Hiruko による「手作り言語」であり、「スカンジナビアの人なら聞けばだいたい意味が理解できる人工語」である (p. 13)。その成り立ちについて、Hiruko は次のように詩的に表現している。

抜粋 1

昔の移民は、一つの国を目ざして来て、その国に死ぬまで留まることが多かったので、そこで話されている言葉を覚えればよかった。しかし、わたしたちはいつまでも移動し続ける。だから、通り過ぎる風景がすべて混ざり合った風のような言葉を話す。(p. 43)

抜粋 1 には、Hiruko のメタ言語的な内省のありようが比喩とともに表現されており、TL の「動態性」のうち、「動的バイリンガリズム」と「ランゲージング」という 2 つの要素を結ぶひとつの接点が立ち現れている。それは身体と環境の接触および相互作用という、生態学的な視点である。抜粋 1 では、Hiruko のイディオレクトであるパンスカ語が、「通り過ぎる風景がすべて混ざり合った風のような言葉」(p. 43) と詩的に描写されている。身体と他者を含めた環境との生態学的な「接触 (contact)」が、イディオレクトの不断の構築過程で重要な役割を果たしていることが、ここには示唆されているように思われる。また、Hiruko はパンスカ語について「(まだ) 完成していない」と述べ、「今の私の状況そのものが言語になっているだけ」と吐露している (p. 23)。ここからは、時空間の変化とともにイディオレクトが常に刷新し続けるという「動態性」を感じ取ることができる。同時に、テレビ番組で初めてパンスカ語を知り、たちまちその魅力に惹き込まれたクヌートは、次のように振り返っている。

抜粋 2

彼女の顔は空中にある複数の文法を吸い込んで、それを体内で溶かして、甘い息にして口から吐き出す。聞いている側は、不思議な文章が文法的に正しいのか正しくないのか判断する機能が停止して、水の中を泳いでいるみたいになる。これからの時代は、液体文法と気体文法が固体文法にとってかわるのかもしれない。僕はどうしてもこの女性に会ってみたい。(p. 15)

抜粋 2 では、Hiruko の話すパンスカ語が「固体文法」と対置されつつ、「液体文法」及び「気体文法」という隠喩によって表現されている。これは抜粋 1 の「風」という比喩と合わせてパンスカ語の「動態性」を直感的に描写する、メタ言語的な詩的表現であると解釈できる。抜粋 2 において「液体文法」と「気体文法」は絶えず動き続け、「文法的に正しいのか正しくないのか」という他者の規範的な文法判断の網から、ときに解き放たれることを可能にする。このような本作品におけるメタ言語的で詩的な視点は、「出汁／ダシ」という隠喩に特に象徴的に表現されていると考えられる。以下に提示する抜粋 3 は、「出汁／ダシ」の概念をめぐるアカッシュと Hiruko の対話を描いている。なお、以下の抜粋では、執筆者による文脈の補足を括弧 () を用いて適宜行っている。

抜粋 3

「ところでダッシュって何ですか。」(と、アカッシュが Hiruko に尋ねる)

「出汁ですか。料理に含まれるおいしい味のことでしょ。干した魚とか海藻とかキノコから出てくるんです。」(と、Hiruko が答える)

「ウマミと同じものですか。」

「同じではないけれど。旨味が特定の味を指すのに対して、出汁はその物質的な面を指すんじゃ

ないかしら。自信はないんだけど。」

「それじゃ、ダシはオーケストラの出す音の総体で、ウマミは音楽ですね。」(pp. 63-64)。

抜粋3では、「ダシ」の概念に初めて触れたアカッシュがその理解を試みている。この発話場面で最終的に音楽の隠喩のもと理解されているのは、オーケストラとのアナロジーでいうと、「ダシ」と「音の総体」が物質的な側面を、「旨味」と「音楽」が多感覚的・知覚的な側面を指すということである。これをさらに展開してTLの「動態性」として解釈するならば、物質的な側面である「ダシ」は「言語的な要素(features)」を、感覚的でモダリティに関わる側面である「旨味」は「ランゲージング」の隠喩として解釈できるのではないだろうか。

また、ここで多和田(2012)を参照するならば、「ダシ」は、「誰の中にもいろいろな文化と言語が混在している」(p. 35)、「言語の純粋さ、文化の純粋さなどありえない」(p. 71)という、個人および社会における文化や言語の異種混濁的なあり方を、読者に想起させる表現でもある。なぜなら、「魚」「海藻」「キノコ」が溶け合う、動的で混濁的な「ダシ」のありようは、個人のイディオレクトにおいて多様な言語的要素が混濁的に共存する様相を連想させるためである。

4.2「創造性」一言葉遊び

次に本節では、本作品における「創造性」の描写について検討する。ここでは、音声的な連想や連関が織りなす、個別命名言語やその他の言語学的分類を超越した言葉遊びの多用に着目する。本作品では例えば、表1のような言葉遊びがみられる。

表1 『地球にちりばめられて』で観察される言葉遊びの事例

#	言語的な要素	連想・連関された(と思われる)言語的な要素	出典頁
1	ハマチ	ハウマッチ(How much)	p. 28
2	Ça va?	サバ	p. 28
3	タコ	タコス(Tacos)の単数形	p. 28
4	抹茶	Macho/ Macha	p. 32
5	有利	ゆうり、百合、リリー	p. 192
6	仕事ぶり	鯨	pp. 249-250
7	(言葉を)シャベル	(言葉を)喋る	p. 326

Li(2011)の“fun with words”とも呼応するこのような言葉遊びについて、多和田(2012)は次のように表現している。

自分の育った発音体系の中では区別がなされない二つの単語(タンゴ)がくっついて踊り出す。そこに産婆(サンバ)が駆け付けて、新しいアイディアが産まれる。これは言語移民の特権であって、一見簡単そうに見えるが、一つの言語の内部に留まる者にはなかなか真似のできない芸だ。その芸が妬ましいので、そんなのは駄洒落に過ぎないさ、と負け惜しみを言う人もいる。(多和田,

2012, pp. 52-53)

このような「創造性」によって駆動される言葉遊びの舞台には、「いつも旅をしている」（多和田，2012, p. iii）という多和田自身や、Hiruko をはじめとする登場人物たちに共通する「移動」と「旅」のモチーフが立ち現れる。そして、「言語移民の特権」とあるように、ここには、「移動」⁵⁾が「常態」（川上，2018, p. 5）となっている「モバイル・ライヴズ (mobile lives)」(Elliott & Urry, 2010; 川上，2021, p. 156) という生のありようが、「創造性」の主な源泉となっていることが示唆されている。

4.3 「批判性」—脱規範化と脱中心化—

最後に、「批判性」に関する本作品の描写を検討したい。本作品では、読者がともするとち合わせる、言語にまつわる多様な「境界」の見直しが促されているように思われる。その「境界」とは、例えば、動物（例:「犬の言語」「蛇語」）と人間の言語の「境界」であり（p. 158, pp. 287-288）、ロボットの「数式」（p. 248）や「ロボット文体」（p. 133）と、人間の言語との「境界」である。また、いわゆる「方言」と「言語」という言語変種間の階層性や権力性でもある（p. 76）。さらに、テンゾ／ナヌークと Hiruko の間で見え隠れする、「第二のアイデンティティ」（p. 155）を獲得した言語学習者と「ネイティブスピーカー」（p. 230）との関係性は、母語規範主義及び「母語イデオロギー」（榊原，2019, p. 44）の影響を受けたものである。ここでは特に、この「母語イデオロギー」の問い直しを読者に迫る、クヌートのメタ言語的な発話を以下に示す。

抜粋 4

実は僕もネイティブという言葉には以前からひっかかっていた。ネイティブは魂と言語がぴったり一致していると信じている人たちがいる。（中略）それから、ネイティブの話す言葉は、文法的に正しいと思っている人もいるが、それだって「大勢の使っている言い方に忠実だ」というだけのことで、必ずしも正しいわけではない。また、ネイティブは語彙が広いと思っている人もいる。しかし日常の忙しさに追われて、決まり切ったことしか言わなくなったネイティブと、別の言語からの翻訳の苦労を重ねる中で常に新しい言葉を探している非ネイティブと、どちらの語彙が本当に広いだろうか。（p. 230）

テンゾ／ナヌークとの邂逅と接触は、Hiruko にも「母語イデオロギー」の変容を同時にもたらす。本作品の前半では、同じ母語話者を探すことを目指していた Hiruko だったが、物語の後半では、「ネイティブは日常、非ネイティブはユートピア」（p. 241）として、両者が必ずしも背反しない関係性を見出している。また、本作品において、このような「境界」の捉えなおしは、以下の2点から、メタ言語的にも実現が試みられているように思われる。第一に、登場人物たちの言説空間においては、彼らに概ね共通する資源である、英語を無批判に共通言語 (lingua franca) として選択するのではなく、対話者によって言語資源を柔軟に選択するという物語設計が通底している。このように、安易に英語を共通言語として選択しないという設定からは、「文化翻訳は特定の文化の優越性という見え透いた仮説の欺瞞性を暴く」（p. 381）という、バーバ（1994/2012）の言葉が想起される。

さらに、本作品の構成全体を見渡してみても、特定の属性や文化、言語を有する人が言説空間を占

拠しないという意味で、脱中心化がはかられているように思われる。つまり、各主要登場人物の「語り」による章立てで一人ひとりの視点を構築することで、物語全体が「ポリフォニー (polyphony)」(Bakhtin, 1981, 1984) の性格を帯びている。「ポリフォニー」とは、端的に言えば、物語世界における、「自立しており融合していない複数の声や意識」のことを指し、また、「自分たちの世界をもった複数の対等な意識」のことを指す (バフチン, 1929/2013, p. 18)。本作品では、「第一章 クヌートは語る」のように、各主要キャラクターの発言権が保障されており、このポリフォニー的な物語設計は三部作の第二作目及び第三作目でも共有されている。

5. 「地動說的文学」としての『地球にちりばめられて』とその教育学的意義

本稿では、本作品の登場人物が紡ぐ言説空間を TLS と解釈したうえで、「動態性」「創造性」「批判性」という TL の主要な 3 つの特徴を指定した (2.2 節)。これをふまえて、3 点の RQ を設定し (2.4 節)、Moment Analysis (Li, 2011) を用いて、RQ に答える試みを行なった (4 節)。その結果、「風」の比喩や「出汁／ダシ」の隠喩を介した「動態性」を表現するメタ言語的で詩的な文体が観察された (4.1 節)。また、個別命名言語の境界線を超越した、ユーモアを帯びた言葉遊びなどの「創造性」の発露 (4.2 節) や、言語をめぐる規範を問い直す登場人物のメタ言語的発話、さらに、ポリフォニーを特徴とした章立ての設計を含む「批判性」の提示 (4.3 節) が確認された。これらの結果は、「トランスリンガルな文学」(佐野, 2023) が重視する書き手の言語実践に加えて、その言語実践をめぐる省察、解釈、評価を物語内部で展開するという点において、本作品を「メタトランスリンガルな文学」として位置づけることが妥当であることを示している。

では、このようなメタ言語的な表象を特徴とする本作品を、「メタトランスリンガルな文学」として読み解くことには、どのような教育学的意義があるのだろうか。本稿では「動態性」「創造性」「批判性」の 3 つの観点から、以下の 3 点を提案する。第一に、「動態性」の観点から、「メタトランスリンガルな文学」は、学習者に、言語を静的で固定的なシステムではなく、環境、身体、他者との接触のなかで常に変化し続ける流動的なプロセスとして理解することを促す。例えば、「風」「液体／気体文法」「ダシ／出汁」(4.1 節) といったメタ言語的な比喩や隠喩は、学習者が「ランゲージング」のダイナミズムを直感的に、身体性に根ざして理解するための手がかりとなるだろう。このことは、人間の日常的な認知活動においてメタファーが遍在しているという Lakoff and Johnson (1980) の主張とも繋がる。文学作品に立ち現れる比喩や隠喩を介して、作品の書き手や登場人物たちの「動態性」に基づく言語観を直感的に迫体験することは、「ことば」の多面的な性質について読者である学習者が省察を深める契機となる。この意味で、本作品で多用される比喩などの文学的装置は、TL 理論を構成する抽象概念を学習者が直感的に理解するための教育学的な資源となる。

第二に「創造性」の観点から、「メタトランスリンガルな文学」に触れることは、単なる「誤用」ではなく「創造的逸脱」としての言葉遊びの価値に、学習者が積極的な意義を見出す契機となることが期待できる。つまり、教育実践の場において「誤用」を恐れずに「ことばで遊ぶ」機会を創出することで、学習者が自身の言語資源の多様性や豊かさに気づき、さらに自己表現の幅を広げる契機を得ることが期待できる。ここでは例えば、「メタトランスリンガルな文学」や「トランスリンガルな文学」を事例として、学習者が自身の言語観を表現したり、言語資源を活用した作文や詩などの創作活

動を行ったりする応用的実践が期待される。

第三に「批判性」の観点から、「メタトランスリンガルな文学」を通して、「母語イデオロギー」や「ネイティブ／非ネイティブ」、「方言／標準語」などについて考える言語活動に取り組むことで、マクロ次元の「ことば」のさまざまな側面や「言語と権力」との関係を批判的に読み解く力を育むことが期待できる。このような教育実践は、言語の「社会的、政治的、イデオロギー的な側面」に対する学習者の理解、つまり「批判的メタ言語的認識」（ガルシアほか, 2016/2024, p. 61）を促し、学習者が自らの言語的立場や社会的アイデンティティを再検討する機会となる。また、本作品が織りなす物語のポリフォニー的構造は、特定の人物を特権化せずに、多様な《声》や視点を尊重する学習環境をデザインするうえで、有用なモデルとなりうる。これらの教育学的取り組みは、TL 理論の目指す社会正義としての言語教育のあり方にも整合するものといえる。

ただし、このような「メタトランスリンガルな文学」を現実の教育実践に応用するためには、以下のような課題も伴う。第一に、実践者に求められる力量である。例えば、実践者には、「メタトランスリンガルな文学」を特徴とする作品を選定し、その作品の文学的特徴を読み解く素養に加えて、TL 理論や言語イデオロギー論に関する知識が求められる。そのため、実践者が単独ですべてを担うには負担が大きいと考えられる。教科横断的な協働や、文学、応用言語学、言語教育学、社会言語学などの専門性をもつ実践者間の連携が重要である。

第二に、学習者の言語背景や経験の多様性をふまえた足場架けが必要である。例えば、日常的に複言語環境を身近に感じている学習者にとって直感的に理解しやすい比喻でも、そうでない学習者にとっては抽象度の高い概念として受け取られる可能性がある。そのため、作品の読解と並行して、学習者自身の言語経験を振り返るワークや具体的な事例の提示による支援が求められる。

第三に、教育効果の評価方法の工夫が不可欠である。メタ言語的認識や言語観の変容は短期的には観察しにくい可能性が高く、長期的な省察プロセスとして現れる場合が多いと考えられる。ポートフォリオやリフレクション・シートを用い、学習者の記述と自己評価を継続的に収集・分析することが、評価の妥当性と信頼性を担保するうえで重要となる。

最後に、今後の研究に向けた課題を提示したい。本稿では、紙幅の関係から、TL のあり方に関して示唆に富む描写ではあるものの、十分に検討できなかった主題がある。例えば、テンゾ／ナヌークの「第二のアイデンティティ」は、「ランゲージング」の「自己形成する過程」（Becker, 1995; García & Li, 2014, p. 8; 加納, 2016, p. 18）の観点から、どのように解釈できるだろうか。また、Susanoo が、多層的な移動に特徴づけられる個人史のなかで、「無口」（p. 261）になったという描写は、「多感覚・多モダリティ」をはじめとする「動態性」や、「言語喪失（language attrition）」（湯川, 2005）の観点から、どのように解釈できるだろうか。これらの主題については別稿で取り上げたい。

川上（2022）は「「定住者」の視点」ではなく、「「動く」視点」を基点・起点として、「移動とことば」の諸相を理解しようとする研究を「地動説的研究」と呼んだ（p. 2）。この考えに依拠するならば、多和田葉子による『地球にちりばめられて』及び後続の二作品は、作者自身、そして、登場人物たちが、「旅」を常態とするなかで創作された「地動説的文学」と解釈できる。このように「地動説的文学」であり、「メタトランスリンガルな文学」である本作品の豊かさを、文学という領域にとどめるのではなく、“trans-disciplinary”（García & Li, 2014, p. 3）に活かす道を、今後も模索していきたい。このような“trans-disciplinary”な試みは、「言葉の力を借りて、新しい共同体を作る」（多和田,

2012, p. 32) ための一歩であり、本稿は、そのための理論的枠組みや事例分析のひとつを提供したいえるだろう。今後の課題とともに、TL 理論と文学研究の架橋を試みる研究活動を続けていきたい。

謝辞

本論文の執筆に際しましては、査読者の先生方より貴重なご示唆とご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿における引用及び出典の記載は、2022 年発行の講談社文庫版による。
- 2) このような「言語の境界線」の恣意性に関して、デリダ (1996/2024) は、「言語」や「方言」を、言語学的に「内在的かつ構造的な」基準で区別することの難しさを指摘している (p. 27)。つまり、政治など言語構造外の「外在的な基準」(p. 27) なしに厳密に区別することは困難であると主張している。
- 3) 湯川・加納 (2021) では、TL 研究の動向として次の 3 種類を挙げている。すなわち、「①教育実践研究、②理論の提示、③バイリンガルの日常の (つまり TL に満ちた) 言語生活の分析」(p. 54) である。佐野 (2023) の分析と合わせて検討すると、①は教育学的志向、③は社会言語学的志向に対応すると本稿では解釈している。
- 4) 術語であるという含意を込めて、あえて括弧で示した。この概念については、文学研究や社会言語学、ディスコース研究、心理学などの学際的な領域で、その多義的な解釈について議論が進められている (Bakhtin, 1981, 1984; Wertsch, 1991; Hymes, 1996; Blommaert, 2005)。本稿は文学を対象とした研究であるため、Bakhtin (1981) の次の定義を参照する。すなわち、“the speaking personality, the speaking consciousness” (p. 434) である。
- 5) 川上 (2021) では、「移動する子ども」学の文脈において、次の 2 つの観点から、「移動」を多層的に捉えている。第一に、「移動する子ども」の「移動経験の貯蔵庫」(p. 5) という観点である。ここでいう「移動」には、「空間」「言語間」「言語教育カテゴリー間」(p. 5) という 3 種類の「移動」が包摂されている。第二に、「「今、ここ」の日常的移動の横軸」と、「あの時そしてこれから」という「過去と未来を繋ぐ個人的移動の縦軸」(p. 5) である。川上 (2021) は、これらを統合した分析概念として、「移動する子ども」を提唱している。

引用文献

- 尾辻恵美 (2022) 「湯呑の貫入に投げ込まれた「移動とことば」」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば 2』(pp. 45-70) くろしお出版
- 温又柔 (2017) 『真ん中の子どもたち』集英社
- 加納なおみ (2016) 「トランス・ランゲージングを考える：多言語使用の実態に根ざした教授法確立のために」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』12, 1-22.
- カミンズ, J. (2021) 『言語マイノリティを支える教育 新装版』(中島和子著訳) 明石書店
- ガルシア, O., ジョンソン, S. I., & セルツァー, K. (2024) 『トランスランゲージング・クラスルーム：子どもたちの複数言語を活用した学校教師の実践』(佐野愛子・中島和子監訳) 明石書店 (Original work published 2016)
- 川上郁雄 (2018) 「なぜ「移動とことば」なのか」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』(pp. 1-14) くろしお出版
- 川上郁雄 (2021) 『「移動する子ども」学』くろしお出版
- 川上郁雄 (2022) 「なぜ「移動とことば」の語りなのか」川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば 2』(pp. 1-13) くろしお出版
- 榎原理智 (2019) 「多和田葉子『地球にちりばめられて』論：「母語の外」とはどこなのか」『日本文学』68 (11), 44-53. https://doi.org/10.20620/nihonbungaku.68.11_44
- 佐野愛子 (2023) 「「トランスリンガルな文学」と教育におけるその可能性」『立命館文学』683, 183-196.
- シスネロス, S. (2018) 『マンゴー通り、ときどきさよなら』白水社 (Original work published 1984)
- 多和田葉子 (2012) 『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』岩波書店 (Original work published 2003)
- 多和田葉子 (2021) 『地球にちりばめられて』講談社文庫 (Original work published 2018)
- 多和田葉子 (2022a) 『カタコトのうわごと』青土社 (Original work published 1999)
- 多和田葉子 (2022b) 『太陽諸島』講談社
- 多和田葉子 (2023) 『星に仄めかされて』講談社文庫 (Original work published 2020)
- デリダ, J. (2024) 『他者の単一言語使用：あるいは起源の補綴』岩波書店 (Original work published 1996)

- バーバ, H. K. (2012)『文化の場所：ポストコロニアリズム 〈新装版〉』（本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪本留美訳）法政大学出版局 (Original work published 1994)
- バフチン, M. M. (2013)『ドストエフスキーの創作の問題』（桑野隆訳）平凡社 (Original work published 1929)
- 湯川笑子 (2005)「バイリンガルの言語喪失を語るための基礎知識」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』1, 1-24.
- 湯川笑子・加納なおみ (2021)「トランス・ランゲージング」再考：その理念、批判、教育実践『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』17, 52-74.
- ロメイニ, S. (1997)『社会のなかの言語』（土田滋・高橋留美訳）三省堂 (Original work published 1994)
- Baker, C. (2001). *Foundations of bilingual education and bilingualism* (3rd ed.). Multilingual Matters.
- Bakhtin, M. M. (1981). *The dialogic imagination: Four essays*. University of Texas Press.
- Bakhtin, M. M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics*. University of Minnesota Press.
- Becker, A. L. (1995). *Beyond translation: Essays toward a modern philosophy*. University of Michigan Press.
- Bloch, B. (1948). A set of postulates for phonemic analysis. *Language*, 24(1), 3-46. <https://doi.org/10.2307/410284>
- Blommaert, J. (2005). *Discourse: A critical introduction*. Cambridge University Press.
- Bourdieu, P. (1991). *Language and symbolic power*. Polity Press.
- Cenoz, J., & Gorter, D. (2015). *Multilingual education: Between language learning and translanguaging*. Cambridge University Press.
- Cenoz, J., & Gorter, D. (2017). Minority languages and sustainable translanguaging: Threat or opportunity? *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 38(10), 901-912. <https://doi.org/10.1080/01434632.2017.1284855>
- Cummins, J. (1979). Cognitive/academic language proficiency, linguistic interdependence, the optimum age question and some other matters. *Working Papers on Bilingualism*, 19, 197-205.
- Cummins, J. (1980). The cross-lingual dimensions of language proficiency: Implications for bilingual education and the optimal age issue. *TESOL Quarterly*, 14(2), 175-187. <https://doi.org/10.2307/3586312>
- Elliott, A., & Urry, J. (2010). *Mobile lives*. Routledge.
- García, O. (2009). *Bilingual education in the 21st century: A global perspective*. Wiley-Blackwell.
- García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan Pivot.
- Hymes, D. (1996). *Ethnography, linguistics, narrative inequality: Toward an understanding of voice*. Taylor & Francis.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.
- Lambert, W. E. (1974). Culture and language as factors in learning and education. In F. E. Aboud & R. D. Mead (Eds.), *Cultural factors in learning and education*. Fifth Western Washington Symposium on Learning.
- Li, W. (2011). Moment Analysis and translanguaging space: Discursive construction of identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics*, 43(5), 1222-1235. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2010.07.035>
- Li, W. (2018). Translanguaging as a practical theory of language. *Applied Linguistics*, 39(1), 9-30. <https://doi.org/10.1093/applin/amx039>
- Otheguy, R., García, O., & Reid, W. (2015). Clarifying translanguaging and deconstructing named languages: A perspective from linguistics. *Applied Linguistics Review*, 6(3), 281-307. <https://doi.org/10.1515/applirev-2015-0014>
- Ren, W., Guo, Y., & Li, W. (2022). Chinese young people's attitudes towards translanguaging in self-praise on social media. *Journal of Pragmatics*, 198, 93-103. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2022.06.006>
- Seals, C. A., Olsen-Reeder, V., Pine, R., Ash, M., & Wallace, C. (2020). Creating translingual teaching resources based on translanguaging grammar rules and pedagogical practices. *Australian Journal of Applied Linguistics*, 3(1), 115-132. <https://doi.org/10.29140/ajal.v3n1.303>
- Wertsch, J. V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Harvard University Press.
- Williams, C. (1994). *Arfarniad o ddulliau dysgu ac addysgu yng nghyd-destun addysg uwchradd ddwyieithog*. [Doctoral dissertation, Bangor University].
- Williams, C. (1996). Secondary education: Teaching in the bilingual situation. In C. Williams, G. Lewis & C. Baker (Eds.), *The language policy: Taking stock* (pp. 39-78). CAI.
- Zhang, Y., & Ren, W. (2022). 'This is so skrrrrr' – creative translanguaging by Chinese micro-blogging users. *International Journal of Multilingualism*, 19(3), 289-304. <https://doi.org/10.1080/14790718.2020.1753746>